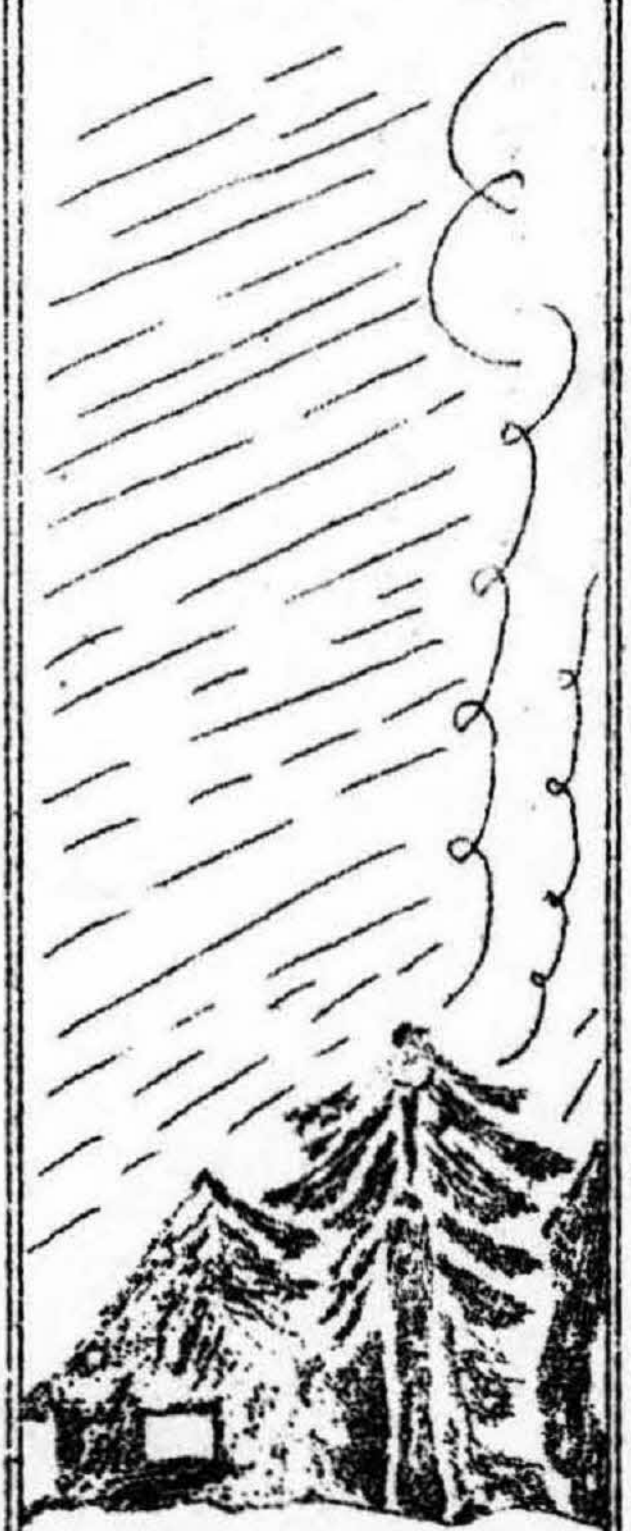


會報



第三年第一号

昭和七年三月十五日發行

通卷十六号

白銀の乱倒

其日の菅平はすさまじい北風が吹きまゝ居た。日本ダボスの林あるゲレンデの尾根が猛烈な雪煙の間から見えつ隠れつしてゐる。此風を衝いて猫岳に登らうといふのだ。九時、熊さんを先頭に行進を起した。息もつけない程横なぐりに吹きつける雪煙の中を悪戦苦闘——そう思ふのは私大かもし知れない——しつゝ正午、漸く七合目の小屋に辿りついた。正月に崩れたばかりの此小屋は木杵も清々しく、風を除けて立樺の林の間に静かに建つて居た。

中央の炉は先着のパーティによつて赤々と焚かれて居た。よくもこゝまで登つて来られたものだと思つた。それは私の技術ではなかつた。熊さん、近方やん、ペンちゃんと一緒に登つてゐるといふことがどれ程私を気大にさせたか知れない。此人

達なら、私が途中で外れてしまつても下まで担いでつてくれる。三人の方、よ、私はそんな事まで考へながら君達についてつたのだ。すうと思つた。實際然度途中から引返さうと思つたかしのれない。が三人の誰かが寂しい顔をしてドン／＼登つていった。勢ひ私もどうしても登らねばならなかつた。

晝食を済して小屋を後に登り始めると今迄忘れて居た様な北風が、今度は吹雪を伴つて物凄く襲つてきた。視野はせい／＼五十米位しかない。黙々として登りつゞけた。と先頭の熊さんが振返つた。

「引返さうか？」

近方やんとペンちゃんは猛烈、登頂を主張した。其瞬間吹雪の間にチラ／＼と拜殿の様なものが見えたと思つた。それは事実だつた。約十分の後、彌固岳神社のさ／＼やかな拜殿の安置された猫岳の頂上に登りついた。そこは不思議にも荒れ狂ふ吹雪の國外にあつて、銀粉の様な雪が霏々としてふりしきつて居た。風が無いのは、近くに防風林でもあるからなのか、それとも此頂上が吹雪帯の上に位置してゐるためなのかは視野を限られてゐるのでよく判らなかつた。小屋までの登りの辛さに較べると小屋から頂上まではさして辛くなかつた。がよくもこゝまで登り得たものだと思ふと、自分によへ奇蹟の類だつた。だから拜殿を背景にしての記

急撮影を私は登頂の証明書だと考へてゐる。何とも形容の出来ない嬉しさが胸一杯にこみあげてきた。それは幾多の華々しいスキー登頂記録の保持者である諸君のとうに経験してしまつた世界であらう。

小憩の後、恐れて居た大滑降が始まつた。ブツブツを縫ふ鮮かなシステムボーゲン、急斜の山腹を降つてゆく美事な半制動、露岩を避けての巧なシユテムクリスチヤニヤ、胸のすくような直滑降、それは先に降つてゆく三人の美事なスキーテクニツクだ。直滑降さへ満足に出来ない私にとつては、此小さな二枚の板切れで、千米にも近い斜面が滑りきれぬかどうかさへも大きな疑問だつた。果せる哉、七転八倒、こけつ、まるびつ、さながら雪達磨の如く転び降るのであつた。心は右へ、足は左へ。杖は飛び、手袋は脱げ、顔は雪に埋れ、腰は露岩に激突といふ有様。滑降ではない転降である。此厄介極まるつれを三人は実に親切にいたはつてくれた。歩き始めたばかりの我子を見守る慈父の如き温顔と眼光とを以て私の難行を見守つて居てくれるのだつた。熊さんは主として吹雪の中から降路の発見に努め、近ちやんとペンちやんは殆んど手をとらんばかりに指導してくれるのだつた。其温い友情に私は心の中で泣きながら、体力

の続く限り滑りつゞけやうと決心した。滑降一時間の後、視野も漸く開け、傾斜も著しく緩くなつてきた。がウインドクラストから粉雪への突然の変化は、既に萎えきつた私を苦もなく転倒させた。日本ダボスのゲレンデを繞る尾根にかゝる頃、空は全く晴れて斜陽は四人の長影を銀盤の上に投じた。快い直滑降が続いた。熊さんと近ちやんの鮮かなスケーティンダが白銀の上を乱舞していった。今まで私を見守つてきてくれたペンちやんは直一本のシユプールを残して流星の様に降つていった。三人が杖をあげてさし招いてゐる。私は疲労にわななく足を踏みしめて最後の直滑降に移つた。

(浩一郎)

原稿の書けぬ話

「針葉樹」に何か書いてくれと頼まれる。ヨシと引受けるには引受けたが、さてとなると一向に書けない。書けないのが当然の様に書けない。その中に期日は迫る。やがて期日は過ぎる。頼まれる時は何を書こうかとは一應聞いて見た。今度「針葉樹」の十周年記念号に書くことの腹案でもと云ふ。さてその腹案がいけない。海のものとも山のものとも、まだ形も出来ぬものだから困る。いつもの

様に誰か楽屋の色男でも引っぱり出して再会新でもやらうか。あ、でもない。こうでもない、どうでもないや、で結局また二三日たちまふ。するとヤンワリと催促が来る。困ったあ。あ、でもない、い、こうでもない、どうでも——。

こんな者相手ぢや編輯者も困るだらうとは同情もする。窮した余りこの現在一番切迫した問題を書いてあやまっちやふことにする。

第一書けもしないのに何故引受けたと云ふ事だ。これは、頼まれた時は何か書けやうだと云ふ可能性をウカと信じて引受けたのだが、いざとなると書けなくなる。まこと、はかない現実である。可能、必ずしも可能に非ず、人の世はかくも哀しいものなのである。これは別に凡愚衆生に限ったものではない。偉い人が揮毫を引受けて書かないのが書讀、繪を書く人のなら画讀だ。いつかの新聞で、故淡口雄幸氏の生前の書讀が次山あつて死後、家人は困つて整理出来るものからドン／＼整理してゐる（どんふ工合に整理してゐる）は書いておかつた）と云ふ話を読んだことがある。あの謹嚴篤実夫自身の如き淡口氏に於てすら書くと云つて書かなかつた書讀が山の如くありとすればましてその人格に雲泥の違ひある吾人に於てをやと云ひ度くなる。

「豚と真珠」の原稿を隣のマダムと家の女房になやまされて書きなやんだ、映画「マダムと女房」の文士も気の毒なこと、思ふ。

持つて生れた筆不精の禍ひはいつでもやつて来る。一番困つたのは卒業論文だった。恥を云はねば話を通らぬ。「日本古代史を通じて人口食糧問題を見る」と云つた様な大して当にもならないお伽話を綴方にして、書くには書いたが書き上げたのが三月の卒業成績発表の三日前。先生に叱られて、あやまつて、頼みこんで、学士論文提出と云ふのだから、我ながら恐入る。こうなると自分の脳細胞組織の欠陥が何処かにあるのぢやないかと考へる。それは原稿を頼まれてから書くこと云ふ家内工業的な註文生産なる生産組織に在るので脳ばかりを悪く云ふには當らない。もつと／＼大量に機械で作る様に原稿を書けて市場生産品としてこれだけ作つたからどれか掲載してくれ、余りはストツクして、何時でも必要に応じて供給する。てなことにすれば編輯者も楽だらうと思ふ。谷譲次、牧逸馬、紙不忌と使ひ分けする様な機械でなければ、吾人の頭腦を以てしては到底駄目だ。然しそれでも書けなくて困ると云ふスランプに陥る時は始終ある訳のものでない。時には頭脳炎、新鮮明朗派でも盡きぬ泉に掘り当てた

様な繕しさを感ずる時もある。又少々アルコールを石して、我ががイストの燃ゆる時、舌輪に油を掛けてしゃべり出す様に、勝手な熱がペン先から送り出る時もある。

そして今、これを書いてる筆は、その何れに属するか、諸賢之を察せよ。(ペン)

THE HIGH ALPS

最近 Jutton の *The High Alps, a natural history*

と *Ice & snow* を読んだ。大変い、本だと思つた。

三部に分かれて居て、第一部は氷及びその変体たる氷及び雪の物理的性質を説き、第二部に於ける説明の基礎となつて居る。第二部は *glaciers* に於いて特有の氷と雪——例へばクレバス、ムーラン、ベルグシユルシンド等を第一部に於て説いた基礎的理論を元として説明し余す所がない。第三は、これらの実験を行ふ爲めになされた旅行の紀文であつて、幾多の氷と雪のおほはれた峠越や氷河をよく観察出来る。山の展望台と云つた様な場所の紀行等がその大部分を占めて居る。現代に於ける氷河学の一方の權威たる氏はむしろ第一部乃至第二部に重点を置いて書かれた事と思はれるが、吾等に取りつては第三部の紀行が最も興味がある。例へば

ベルナーオーバーランドではファウルホルン、エギツシホルン、ベニンアルプスでは、ウンテルガベルホルン、チツシアルプ、モンブランナスインではコルドバルム、モンタンベル等、ホテルからせいど、四五時間も美しいアルプの中を吞気に登つて行けば、壮大なるアルプスの峯々が一目に見えたせる様ふ所、そして多くの場合、あふ、かい場の光の中にひたつてデジユネを楽しむ事が出来る。と云つた様なイクスカージョンが流麗な筆によつて書かれて居る事が一番吾々にはうれしい事だ。殊にそれに加へて百数十枚の実に気持のよい写真——それは筆者がその文章に出て来るその旅行で自らか撮つたもの——が一つ／＼吾々のイリュージョンを現実に近いものとしてくれる事がありがたい。ファウルホルンの紀行で、バツハアルプゼ——に属するシスレツクホルンや、一番大きな奴が先頭に立つて牛の群が首の鈴を鳴しながら湖の中に入つて行く所等、一つ一つ文章と対照してその時の気持を巧につかんだ写真が入つて居る等、心にくき近にうまく行つて居る。

ヒマラヤの外の山は山でよいと云ふ様な事を云ふ小さな人とはとにかく、山を愛しその心の中にとけ込みたいと思ふ人々に取つては又とない近來の好着と云ふ可きであらう。定価五円貳拾五銭、丸

善にあり。

"O ye see and know, bless ye the Lord:
Praise him, and magnify him for ever."

(要助)

中島君の消息

昭和卒業の研究會の連中が接した、畏友中島君の病床からのなつき消息が、最近磯野君の所へ届いたので、本欄へ掲載して、病める山の友をなぐさめたいと思ひます。

磯野君

実に永く御無沙汰して居ります、山の絵を有難う、欄向に掛けて眺めて居ります、少し小さいので下では充分見えないので残念です、先月中旬鈴木増山の諸君が乗鞍の帰途参さんと一緒にわがわが立寄ってくれました。

小生の病氣も相変わらず実に文字通りの相変わらずで悪くならないが良くも決してならない、只去年の七、八月頃が最も悪かったです但其の当時に比して病状がやゝ安定した点をなぐさめにして居る次第です。

学校の方は、身体の方が全快しても他に就職する様な事は困難な事ですから肩書が有つてもしや

うもふい事ですすから退学に決心です、元来筆不肖のところへ終日床に卧して居るので皆さんに殆ど便りをしないで居りますがお許し下さい。勝手な御願ですが面白い事が有つたらせいで御知らせ下さい。

昭和七年二月十日

四日市市南町二五五六

中島嘉一郎

磯野計藏様

私は生きてゐる

前号に於て諸君は、將に先輩殺しの大罪を犯さんとした不逞漢。の殺人未遂にかゝる戦慄すべき告白を讀まれたであらう。そして岩原スキー場では飛道具さへも用ひやうとした恐るべき計劃のあつた事に気付いたであらう。何が彼をさうさせたか、それは私が不用意に答へた「殺して貰はう」といふ教語に端を起してゐるらしいが、其言葉の創始者は今札幌に居る奥野だ、一昨年の暮、私が熊の場行の勧誘を受けた時、彼は前任前の多忙の時間を割いて訪ねてきて「あの連中と一緒にゆくと殺されるよ」と切に忠告してくれたのだ。私は早速中止した、其結果はどうであつたか、

一味の一人杉木某は、当時の誌上に「チヤンスを逸した無念さ」について細々と書いたのを諸君は記憶してゐるだらう。爾来私は「あの通中」から誘はれたら決死の覚悟をする様になつたのである。さてこそ「殺して貰はう」と言つたのであつた。が聞くと思ふとは大違ひ、彼等は決して殺人面ではないことが判つた。最近に於ける純好のチヤンス管平行で私は彼等一味撲滅と一日二夜行を伴にしたに不拘、無事生還したばかりか、「白銀の乱」例にも評述した如く、マリヤの腫と歓迎の温容とを以て待遇された事が最も雄弁に其真相を物語つてゐる。私は最早決死の覚悟で行かなくともいい。だから春季皇靈祭と日曜との続く休日には安心して一緒に那須に行かうと思つてゐる。

(七兵衛)

編輯雜記

河相 薫 一月下旬上京。二月一日より入管。
(広島市第五師団第十一聯隊第十一中隊幹部候補生)
小栗吉雄 例のセンコメー宣傳にて奔走中。白水屋へ送つて来た広告文に依れば、料理屋、置屋、待合の一大福音なりと称す。

吉沢一郎 二月初旬男子御誕生、おどろしく「謙」と名付く。
久保田禮治 八王子桑華織物株式会社に二月下旬より勤務して居る。朝七時より夜六時迄。勿論自分の工場。

二月十一日には例の丹沢焼山へ登山せる由

磯野計藏 二月廿四日江戸発、北海道へスキーの旅に出掛ける。店の都合で、残念ながら棄權した小生、彼を上野駅に送れば、奥國流紳士に化けた愛助氏二等寝台車に悠然とおさまつて居た。行けなかつた方が及つて小生には幸せだつたかしらと考へた。青森、札幌と続々、雪の良さ、スキーの楽しさを報じて来る、奥野氏がスラムボーゲンをやるのだから、雪の良さが分かるだらうつて。

中川孫一 約十日間も関西へ出張し、帰京するや忽々ペンちゃんの一行と菅平へ行く。(然かも猫岳征服)
一月廿一日には越後岩原スキー行。

村尾金三、近藤恒雄、吉沢一郎、中川孫一、二月廿一日菅平スキー行、猫岳登頂。

浦松佐美太郎、一月下旬赤倉、妙高(温泉に非ず)に登山。

奥野綱重、突然耳疾にて、折角の北海道行きの磯野も、いよく鬼故されたり。二十六日磯野来札、同行の方を定山溪へ行った由、二十七日午後より市内を歩き廻り種々話をした想像以上に札幌が良いと云ふて居た。二十八日スキー大会のシヤンプを見、午後札幌の外廓をなす四〇〇米程の山をブラつく。二十九日朝十時森の方へ行った、十日位滞在の由、耳疾にて同行不能。